

「トマスの福音書」は、1945年に、エジプトのナイル川河畔の洞窟に1850年以上も埋もれていた壺の中から奇跡的に発見されました。これは、イエスの言葉だけを記載してあるもので、「言葉福音書」と呼ばれています。全部で114項目ありますが、そのほとんどが例え話です。一読して何を言いたいのか、良くわからないものが多いのですが、「それらは、瞑想や悟りのお話で、イエスが話した例え話である」と仮定して、では、一体それが何の例え話であるのかを解説しています。今回は、その第8回目です。

なお、各センテンスの訳文は、上段、中段、下段の順に

(1) Thomas O. Lambdin による英訳

(2) Stephen Patterson and Marvin Meyer による英訳

(3) 「トマスによる福音書」(荒井献著・講談社学術文庫)による和訳

の順に記載しています。

---

(39) Jesus said, "The pharisees and the scribes have taken the keys of knowledge (gnosis) and hidden them. They themselves have not entered, nor have they allowed to enter those who wish to. You, however, be as wise as serpents and as innocent as doves."

(39) Jesus said, "The Pharisees and the scholars have taken the keys of knowledge and have hidden them. They have not entered nor have they allowed those who want to enter to do so. As for you, be as sly as snakes and as simple as doves."

(39) イエスが言った、「パリサイ人や法律学者たちは知識の鍵を受けましたが、それを隠した。彼らも入らないばかりか、入ろうとする人々をそうさせなかった。しかしあなたがたは、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」

---

また、40番は、その続きのようです。

---

(40) Jesus said, "A grapevine has been planted outside of the father, but being unsound, it will be pulled up by its roots and destroyed."

(40) Jesus said, "A grapevine has been planted apart from the Father. Since it is not

strong, it will be pulled up by its root and will perish."

(40) イエスが言った、「一本のぶどうの木が父の外側に植えられた。そして、それが固められていなかったの、それは根元から抜き取られて、亡びゆくであろう」

---

ここは、どうも「パリサイ人」「法律学者」に批判的な言明のようです。この言明を説明しようとする、ここには出てきませんが、「パリサイ人」「法律学者」だけでなく、「エッセネ派」「熱心党」など、当時、ローマに支配されていたユダヤ民族の歴史的、経済的、軍事的、宗教的なさまざまな状況をも、説明する必要がでてきます。それらについては、世の中にたくさんの本が出ていますし、また、諸説乱立しています。歴史的なことに興味のあるかたは、面白いと思います。読んでみてください。

ここで、イエスは、「パリサイ人」を批判していますが、私は、イエスは、他の団体等を批判等はあまりしなかったのではないだろうかと思っています。ですから、この39番、40番のところは、もしかすると、後からの人がその人が所属する団体のために書き加えたのかもしれない。つまり、イエスの口を使った形で、後から追加になったのかもしれないと思うわけです。

ということで、この39番、40番は、一応、説明はこのあたりにしておきます。また、これから先も、同じような、政治的歴史的な事柄を含むイエスの言明については、イエスがそれを言ったかどうかはわかりませんので、飛ばしていくことにします。たとえ、それらを飛ばしたからと言って、このトマスの福音書から得られるであろう、修行の具体的なヒントを見逃すことはないと思いますので。

ただし、イエスが巻き込まれたかもしれない、政争や宗教上の争いや、それがもつて殺されることになったかもしれない本当の経緯について、興味がないわけではありません。いずれ、機会があれば、「イエスはなぜ死ぬことになったのか」それを小説風に推理、再現してみたいものだとは思っております。でも、この解説は推理小説ではないので、本題に戻りましょう。トマスの福音書に埋め込まれているダイヤモンドのような珠玉の修行のヒントの地道な発掘です。

莫大な財宝が埋め込まれていますので、その発掘をしましょう。

さて、さっそくその、第41番は、次のような言明です。

---

(41) Jesus said, "Whoever has something in his hand will receive more, and whoever has nothing will be deprived of even the little he has."

(41) Jesus said, "Whoever has something in hand will be given more, and whoever has

nothing will be deprived of even the little they have."

(41) イエスが言った、「おおよそ、手に持っている人は、与えられ、持っていない人は、持っているわずかなものまでも取り上げられるであろう」

これは、共観福音書のいずれにも載っている言葉です。例えば、マタイの福音書の、13章12項では、「持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる」、さらに、25章29項には、「だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる」と、ほぼ同じ内容が載っています。

つまり、この例え話は、どの弟子も同じように何度も聞いたということでしょう。

とてもおかしな逆説的なお話です。普通、常識的には「貧しい者に施しを与えましょう」と言います。豊かな者にさらに恵みを与えようとは言わないでしょう。しかし、イエスは助けるべき貧しい人を、さらに突き落とすようなことを言っています。「貧乏人は麦を食え」より、もっとひどいですね。貧しい者からさらに取り上げようってことです。まるで逆を言っています。

しかし、修行のポイントを説明する言葉としては、これは正しいですし、真理をついています。それはあとで説明しますが、そのポイントを外すとまったく理解に苦しむ例え話になります。ですから、他の共観福音書には、この理解不能な例えについて、なんとか辻褄を合わせようとして、要らぬ編集句があとから付け加えられています。汚れています。トマスの福音書は、この例えだけが残っていて、後からつけた編集句はありません。美しいと思います。

さて、では、実際はどんなことを説明する際に、この例え話になったかを、説明しましょう。

イエスは、「汝の隣人を愛せよ」と言った愛の人です。瞑想はマインドの不要な働きを止めて、無我、無欲、無私になる優れた方法ですが、それは欲の方向に走ってるマインドを止めるということでもあります。

実はマインドは、愛でも走れます。ですから愛の方向に走らせれば、欲の方向に走るマインドは「居ない」ということです。一つの車で前に進んだり、後ろに進んだりできます。エンジンは一つでもギアを入れ替えれば方向は逆になります。同様に、同じ一つのマインドですが、その走り方、回転の仕方によって、心の中は「欲」がいっぱいになったり、「愛」がいっぱいになったりするということです。同じ月ですが明

るく満月になったり暗く新月になったりするということです。同じ海ですが満潮になったり干潮になったりするということです。

愛が心の中に溢れていると、その人の心は豊かで、満ち足りていて、幸福感で明るく輝いています。欲が心の中に渦巻いているとその人の心は、貧しく、暗く惨めで苦しく不幸です。

さて、そこまでは誰でも分かるのですが、ではどうやったら愛が心に満ちるかということになると、大方の人はそこで迷ってしまいます。間違っしてしまいます。ですからイエスが何度も何度もそのやりかたやコツを弟子達に話した事は、想像に難くありません。

「いいかい。愛が心に満ち満ちていれば、誰でもすぐに心が豊かで幸福感に満たされる。とても簡単だ。欲を捨てようとするとなかなか難しいが、愛を満たそうとするとすぐにそうできる」

「そうですね、イエス様。誰かに愛されたり、母親に抱擁されたり、愛を与えてもらうと、嬉しくて、心が豊かになりますね。だからどうやったら愛されるかいつも思ってるのですが…」

「えっ、ああそうか、ここで間違うのか。いいかい、愛してもらいたいと思うのは、自分の中にまだ愛が足りないと思ってることだ」

「そうですね」

「不足していると思っていることだ。つまり自分はまだ貧しいと思ってることだ。だから愛が欲しい。愛が欲しいというのは欲だよ。そう思ったとたんに欲が膨らんでいるわけだ。つまり、さらに自分を貧しく思っていることだ。そうではなくて、今自分は愛に満ちていて愛を外に出せると思ってる。自分は愛に不自由してなくて、とても豊かに愛を持っていて、だから、その溢れる愛を誰かにあげようと思ってる。あげる対象はそんなに遠くの人でなくていいよ。身近な人でいいのだ。身近な人がいなければ小さな動物や植物でもいい。とにかく自分の愛を外に出すことだ。与えることだ」

「はい、イエス様」

「そうすると、いいかい、マインドは、自分の中に愛が満ちているのか、愛が足りないのかは、よく知らない。でも、愛が自分の中から、外に向かって流れていくのを感じると、『ああ、きっと、自分の中には愛が溢れているのだ。だから、溢れ出ているのだ』と思うわけだ。つまりマインドは自分の中には愛が満ち満ちているはずだ